

# 現代社会に関わる考古学の実践的研究

松 田 朝 由

## 要 旨

近年、墓地問題に伴う新しい墓地のあり方として「葬送の自由」が主張されているが、こうした「葬送の自由」は、現代日本人に容易に受け入れられるものなのか、また、受け入れていいのであろうか。「葬送の自由」の考え方には葬送や造墓を自己の権利として捉えていることに特徴がある。そこで本研究では墓標の形態、刻字内容を観察の対象として日本人の墓イメージの歴史的な展開を検討し、この問題に対して一意見を提出することを目的とした。

第1部では墓標が普及した18世紀から「先祖代々墓」の刻字の認められる家墓の成立までの展開を検討した。結果、18世紀に死者・先祖供養の対象として普及した墓標が19世紀に至る過程で、個人あるいは家を象徴とするシンボリックな性格を強めていくことが確認できた。そして、続く20世紀初頭の家墓の成立は家をシンボルとした墓標の完成をもたらした、それ以前における墓の伝統性を一新する革新であることが明らかとなった。

第2部では中世から墓標の普及する18世紀までの展開を検討した。結果、供養塔としての性格をもつ中世五輪塔が、16世紀後半から17世紀に一族・家族の総供養塔としてシンボル化する中で大型化し、そこから個人のシンボル、或いは崇拜の対象として展開していったことを指摘した。そして、その結果が五輪塔からより故人の刻字が強く表現された墓標への変化をもたらしたと理解した。続いて、17世紀後半から18世紀初頭は、こうした墓標が寺檀制度の確立に伴い死者・先祖供養の対象として一般階層で用いら

れたと理解し、墓イメージとして、シンボル、崇拜の対象から供養の対象に変化していったと理解した。

第3部では家墓の成立以降を検討の対象とした。第二次世界大戦以後、法改正、都市化、少子化、核家族化にともなう「家」の変質、崩壊にも関わらず、墓標は家墓として発展したが、それは墓標の区画化、墓地の美化として展開した。こうした展開の要因には墓石業のセット販売戦略があり、そこから展開する墓イメージとして「死後の住処」の観念があったものと理解した。

以上の検討から「葬送の自由」について考えた。まず「葬送の自由」の思考の背景として墓が自己の権利の場であることを想定した時、そこには自己主張の場としての墓イメージを理解することができる。こうした墓イメージは、家のシンボルとして成立した家墓が戦後において「死後の住処」として展開したことから、家に埋設していた個人が墓において自己主張しはじめたことが指摘でき、その延長として位置付けられる。従って、日本人の墓イメージの歴史的展開においてこうした観念の定着はごく最近（第二次世界大戦後）である点を第1に主張する。また、この「葬送の自由」が墓イメージの展開からは先駆的な考え方である一方で、現状としてまだ十分な普及をみない要因を考えることは重要であろう。そこで家墓のもつ性格について注目すれば以下の点が指摘できる。つまり、都市化、少子化、核家族化にともない、現代日本人の多くが土地、伝統的な集団から離れ、自らの帰属する場所、アイデンティティ確認の場の相対的低下を強いられ、不安定な状態にあると思われる。こうした現状において日本人の精神的な安定の場となっているのが故郷であり、その故郷の1シーンを担っているのが墓であると主張する。従って、現在において家墓が美化され依然として増加発展している内的要因として以上の墓の役割を想定する。「葬送の自由」を検討する際には、こうした墓の側面も考慮して、今後対策していく必要性を主張する。